

最優秀賞は田辺聖子賞のページ（16ページ）

## 【優秀賞】

## かこうりや

百木 優理亜（東京都 田園調布学園中等部 3年生）

雲一つない青天。鳴き交うアブラゼミやミンミンゼミ。季節はすっかり夏である。今日は八月十二日。ボクの中学三年生の夏休みも、終盤に差し掛かっている。身体が溶けてしまうような炎天下に、ボクは流れてくる汗を頻繁に拭って、お使いをしている。ここは、関東でもそこそこの有名な商店街の、M商店街。ボクの家前の坂を下りたところにある。このお使いは、本来なら兄が行くのだが、あろうことか、兄は「面倒くさい」の一言で、ボクに押し付けてきたのだ。ボクにだって、やりたいこと、やらなければならぬことがあるのに。確かに、兄の千春——普段は「ちーくん」と呼んでいる——が現在大学一年生で、勉強やサークル活動、アルバイトなどで多忙なことは分かっている。しかし、ボクだって中学三年生。夏休みが明けた直後に試験だし、自由研究もあるのだ。友人たちと、息抜きにプールや海に行つて遊びたい。それなのに、あの兄は何なんだ。

頭の中で文句を展開しながら、母親が書いたお使いリストの野

菜を買って、八百屋を出た。二つ隣の老舗たい焼き屋から漂う甘い匂いに、少しばかり頬を緩めていると、ふと見たことのないお店が目に入る。そのお店は、八百屋の向かいにあるお米屋の角を曲がった目立たない路地に立っていた。十四年もこの町に住んでいるけれど、あんなお店は見たことがない。新しく建てられたのだろうか。近寄りがたい雰囲気のもの、そのお店に入っていく人はいない。

入ってみようかな。

子供ならではの好奇心で、ボクはお米屋の路地に足を踏み入れた。

「かこうりや……」

お店の看板には、そう記されていた。「かこうり」という瓜を売っているのだろうか。匂いを嗅ぐも、瓜らしい匂いはしない。どうしよう。入ろうかな。でも、もしもこのお店の中に怖いオジサンたち——マフィアとか何某組のアジトとかだったらどうしよう。もしかして、「かこうり」というのは新種、もしくはマイナーな麻薬で、このお店はその取り引きをしているのだろうか。そして店に入り取り引きを目撃してしまったボクは組織に誘拐、または監禁、または殺害、またはそれらのフルコースを味わう。そうなったらどうしよう——。

いくつもの「もしも」「どうしよう」が脳内を駆け巡る。一度不安や憂いを覚えると思考の迷宮へと誘われる。ボクの悪い癖だ。「考えるより先に行動」をモットーにしてプラス思考になり、切り替えようと試みるも、なかなか直すことができない。この癖に加え、あともう一つ悪癖があるのだが、そのことを考えるとまた抜け出すことが出来ない思考の迷宮へと引きずられてしまうので、顔を横に勢いよく振って、考えないようにした。

「よし、入ろう」

もうどうにでもなれ。誘拐も監禁も殺害もフルコースもどんと来いだ。来世へ期待を寄せながら、おどろおどろしい扉を開けた。

「こ、こんにはは」

「おや、いらっしやい」

「はえ……？」

銃声や怒声が聞こえることを覚悟していたが、それとは反対の、穏やかで優しい声に、思わず変な声が出る。カウンター奥にいたのは、絵本でよく見るサンタさんのようなおじいさんだった。

「暑かっただろう。ジュースはいるかい」

「えっ、ああ、はい。お願いします」

しまった。つい誘いにのってしまった。そのジュースの中に「かこうり」が入っていたらどうするつもりなんだボクは。でも、こんな優しいような人を疑っていいのだろうか。

「どうぞ、座って」

おじいさんはカウンターにジュースを置いて、ボクを席に促した。ボクは仕掛けられているかもしれない畏に注意しながら座った。

「あの…、「かこうり」って、どんな瓜なんですか」

「瓜？」

やっぱり麻葉のかな。

ボクが悶々と考えていると、おじいさんはふおっふおっとなら笑い方までサンタさんだ。否、それどころではない。

「おじいさん…」

「少年、「かこうり」とは、「過去」を「売る」で「過去売り」だよ」

「『過去売り』…」

「そう。ここに来たということとは、買いたい過去があるのだろう。君の名前を覚えてくれないかい」

ボクは迷った。過去を売る。そんな非現実的な話は信じられない。だけど、もしも本当にそんなことが出来るのなら。

「ボクは、桃川春陽です」

オレンジジュースの氷が、照明に反射して光っている。

「名乗ったということは、買いたい過去があるんだね、春陽くん」

「はい」

「売りたい過去の話を聞かせてくれるかな」

おじいさんは、優しい声で尋ねた。誘われるように頷いたボクは、ジュースを一口飲んでから、口を開いた。

ボクには、大好きな祖父がいる。名前は、桃川賢二。父方の祖父だ。小さな頃のことによく覚えていないが、兄は四歳まで、父方の祖父の家に住んでいたらしい。ボクが生まれて新居を構えるまでの期間だ。兄は祖父の家の壁にクレヨンで落書きをするなど、甚だ迷惑をかけていたようだ。

小学生になって、毎週日曜日に、父と兄とボクで、祖父母の家に行くことになった。

「ちーくん、今日は何する？」

「うーんとね。おれ、モノマネ大会がいいなあ！」

「モノマネ？ 面白そう！ さんせい！」

ボクと兄は、毎週祖父母の前で催し物を披露していた。モノマネ、お絵描き対決、ジェスチャーゲーム、歌、踊りなど、様々だ。それを祖父が撮影し、祖母が参加した。毎週日曜日が待ち遠しく、大好きだった。

しかし、兄が中学生になってから、兄と一緒に祖父母の家に行

く機会がなくなり、ボクと父だけで行くようになった。催し物は、兄がいないと成立しないため、ボクがそれを一人ですることは、一度もなかった。日曜日は、「ただの休日」、になってしまった。それでも祖父母は、ボクが家を訪れる度、柿やぶどう、梨や桃を剥いてくれた。ボクは、そのありがたさに気付いていなかった。小学四年生になり、ボクは塾に通い始めた。日曜日に、毎月三回程テストがあった。ボクと祖父母の距離がますます遠くなった。

それでも、ボクは空いている日曜日は家を訪れた。会いたいからだ。

だけど、時間はそれを許さなかった。小学五年生になって、受験勉強が本格化した。遊んでいる暇もなくなっていた。小学六年生になると、完全に「大好きな日曜日」はなくなってしまった。中学生になって、日曜日でも学校に通うことが多くなった。それに加え、定期試験や、英語検定を受けるようにもなった。ボクは既に、祖父母のことを気にする時間はなかった。一年に、三回も会わなかったかもしれない。

中学二年生の冬、十二月。日曜日だった。

父、彰人の慌ただしい声と物音が目覚めた。嫌な予感がする。起きたくないな、と布団の中で二度寝をしようとする、ボクの部屋の扉が開かれた。

「じいさんが倒れたから車出して」

その父の言葉は、ボクではなくボクの部屋に寒さから逃れるために来た母、ゆかに向けられたものだった。

一瞬、息をすることが出来なくなつた。

「じいちゃんが倒れた？ 何故？ いつ？」

数々の不安と疑問が、脳内を駆け巡る。どうしよう、じいちゃん

んが、死ぬ……？

両親が祖父母の家へ向かった後、ボクは気が気でなくなつて、兄の部屋に飛び込んだ。

「ねえ、じいちゃんが倒れたって」

こういう時にどんな口調で話したらいいのかわからなくなつて、冷静な口調になったが、頭の中は全く冷静ではない。

兄はもともと布団から顔を出した。

「……父さんと母さんは」

「……じいちゃん家に行った」

「ふうん」

そう言つて兄は再び眠りについた。

もう駄目だ、この兄は。

ボクは腹いせに激しい音をたてて兄の部屋の扉を閉め、階段を降りた。

「今年のおせちは、なんと一味違います——」

テレビから流れてくる女性レポーターの音が、入ってこない。

いつか来るとは分かっていた。でも、いざその時が迫っていることを感じさせられると、とても、怖い。

そして、ボクは心に誓つた。もう二度と、祖父には会わないと。

ボクのことなど、あの人はとくに忘れていない。最初から、あの人の世界にボクはいない。そうだ。それでいいんだ。それで——。

しばらくして、両親が帰ってきた。祖父は台所で倒れていたらしい。病院に搬送され、命に別状はなかった。

「病院、お見舞いに行かなくていいの」

母に尋ねられても、小さく頷いて、逃げるように自室に閉じこもつた。

怖かった。

ボクのことを忘れた祖父に拒否されることが、何よりも怖い。仮に覚えてくれていたとしても、思い出が、安らかな死の邪魔をする。

「まだ生きていたい」と思わせてしまう。

だからどうか、ボクのことには忘れたまま、眠ってほしい。

自分の心に言い訳をして、「会いたい」ととじこめ、知らないフリ。その方が、ボクもあの人も幸せなのだ」と心に言い聞かせた。これが、ボクの悪癖のもう一つなのだ。

二月十三日。火曜日の授業中。ボクはふと、教室の時計を見上げた。

死神が、見えた。

思わず息が詰まる。瞬きをしたら見えなくなったが、黒いマントに身を包み、大きな鎌を持ったその姿が、脳裏に焼き付いて離れない。とてつもない嫌な予感を覚えながら、その日を終えた。誰にも言うことは出来なかった。

翌日、家に帰ると、母と兄が夕飯を食べていた。何だか部屋が暗い気がする。空気がおかしい。

不思議に思いながら私服に着替え、ほかほかのご飯を一口食べた時、母が口を開いた。

「言いたいことがあるんだけど」

「かなりシヨックだよ」

ボクは、全てを理解した。この雰囲気と、先日からの嫌な予感。

じいちゃんが、

「じいちゃんが、月曜日に亡くなったって」

食べようと箸でつかんでいたご飯が、茶碗に落ちた。

「——そっか」

自分の声が震えていなかったことに、少し救われた気がした。「驚かないの」

「うん。何となく、わかってたから」

それ以降、誰も口を開かなかった。

カレンダーには、翌週の月曜日と火曜日に「葬式」と書きこまれていた。

ボクは、母に渡された棺に入れるための手紙に、泣きながら謝罪と、願いを綴った。

葬式までの時間は、あつという間に過ぎていった。ことあるごとじいちゃんを思い出しては、所構わず泣いていた。

葬式当日、月曜日。葬式には、母方の祖父母やじいちゃんの兄弟の方など、二十人程度の人が集まった。

ボクは終始泣いた。お坊さんのお経のときも、棺に花を入れるときも、棺を見送った後も、ずっと。

祖母と両親が会話している。すると、祖母の言葉が聞こえてきた。

「いつもいつも、ちーくんとはるくんの写真見て、『会いたい』って言っとったよ」

——耳を疑った。

じいちゃんが、会いたいと言っていた？

認識すると共に、莫大な後悔に襲われた。そして、ボクがしたことへの罪の重さに気が付いた。

ボクは、逃げていたのだ。じいちゃんに拒絶されることが怖かった。自分の「嘘」を正当化し、逃げていただけだった。心臓を抉り出して、潰したくなった。じいちゃんは、ボクのせいで、悲しい死を迎えることになった。

ボクは、最低な人間だ。

火曜日、遺体を燃やす日。

燃やされて骨だけになったじいちゃんは、碎かれていった。祖母が口を開いた。

「魚好きだったから、骨が丈夫なんだよ」

知らなかった。じいちゃんが魚を好んでいたなんて。考えてみれば、ボクは、じいちゃんの誕生日も、好きな花も知らなかった。自分の無知さに、また泣いた。

葬式が終わって、一カ月は、毎夜毎夜泣いた。いくら泣いて謝っても、じいちゃんは帰らない。その事実にも、また泣くのである。

「それが、君が売りたい過去なんだね」

おじいさんは、ゆっくり頷いて言った。ボクのジュースの水は、ほぼ溶けている。

「はい。でも、もういいんです」

「どうしてだい？」

ボクの言葉に、おじいさんは小さな目を丸くした。ボクは目を閉じて、口を開く。

「思い出したんです。あの夢を」

ペットのチョコ丸——八歳のウサギだ——のケージの前で、ボクの隣に座った人は、もうここにはいない筈の人だった。

「じいちゃん……」

「……」

じいちゃんは、いつもボクに見せてくれていた笑顔を、もう一度ボクに向けた。

——ああ、夢か。

自覚すると同時に、ボクの中から大粒の涙が、とめどなく零れできた。

「じいちゃん、ごめん……ボク……」

謝罪の言葉を紡ごうとするも、上手く話すことが出来ない。じいちゃんは、そんなボクを、静かに微笑んで見つめているだけだったけれど、不意に触れたじいちゃんの手は、温かかった。

「夢はそこで終わってしまいました。ボクは気付いたんです。これは、誰もがし得る後悔なんだって」

ボクは、おじいさんをしっかりと見据え、思いを伝える。

「ボクは、この過去の辛さや悲しさ、そして逃げないことの強さと優しさと勇気と愛情を伝えたい。これから先、ボクのような思いをする人がいなくなるように。後悔をする人が一人でも少なくなるように。」

だから、過去は売りません。ごめんなさい。結局何もしないのに、このお店に入ってしまった——」

目のやり場に困り、カウンター上のジュースに目を落とす。氷はもうすっかり溶けていた。

「いいんだよ。君がそれでいいのならね」

「……ありがとうございます」

「礼なんていいよ、春陽くん」

おじいさんは、顔を上げたボクの肩に手を置いた。

「もしもまた何かあったら、いつでもここに来ていいよ。オレんジュースを用意して、待っているからね、『少年』」

「はい。本当にありがとうございます」

ボクは丁寧にお辞儀をして、ジュースの残りを一気に飲みほ

し、店を出た。真夏の暑さがなんだか心地良くなって、走って家に帰った。

じいちゃん、ボクのこと、どこかで見てるかな。もしも見ていたら、ボクの人生をこれから見守っていてほしい。

絶対に、この辛さも悲しさも、忘れない。

大量のアルバムや本が置いてある部屋。

僕は最後の一文を書き、万年筆を置いた。後で担当に電話しなくちゃ。

作業で疲れた僕を労うように、開け放っていた窓から風が入り込んだ。

「…あ、春の匂いだ」

庭のジンチョウゲが、静かに揺れた。